

◀露山が馬以外の動物を描いた珍しい作品。めいの結婚祝いに露山が贈ったものだ。めい夫妻のえとであるイノシシとネズミの仲むつまじい姿を描いている。野島富士末さん所蔵。(帯広市)



間で馬を百頭描いたら、米一俵とみそ、しょうゆを一たるやるう」と言われ、見事成し遂げたという。それがきっかけで画家をなりわいにするようになり、その後各地を放浪して馬の肖像画や墨絵を描くようになった。道内はもちろん遠く青森県まで出掛けていたという。「いつも画用紙と画材を入れた黒い筒を背中に背負って旅をしていたよ。当時の人としては大柄で、五尺五寸(約百六十七センチ)はあった。何しろ酒の強い人だね。時折ふらりと家に遊びに来て一晩中酒を飲んでいた」と野島さんは当時を振り返る。

◀浜中町の旧山田牧場に残された露山には珍しいスマートな馬の絵。軍馬として飼育されていた馬であろう。軍馬のセリ市が立ち、軍馬生産の盛んだった同町ならではの地域性豊かな作品といえよう。(浜中町)



露山は、観察眼と記憶力に天賦の才を持っていた。馬の肖像画は、写生するのではなく鉛筆で簡単にスケッチを取り、記憶を頼りに自宅や宿泊先で作品にするのが常だった。だが、仕上がった絵は細かな特徴まで実物とそっくりで、しばしば依頼者を驚かせたそう。馬の絵のほか、相撲絵やほかの動物の絵も見事だったという。野島さんの家には、結婚祝いにと露山から贈られたイノシシとネズミの絵が今も残る。

露山が白石の菊水に居を定めたのは、昭和の初めころだという。だが、その後も放浪は続いたらしい。何カ月も家を空けることもザラであったようだ。そして昭和三十三年、菊水の地で波乱の生涯を終える。七十一歳だったという。

その晩、特にお気に入りだという露山の絵を前に三田さんと二人で酒を飲んだ。やっとの思いで露山にたどり着いた満足感に酔いの回りも早い。「露山の絵を見ると、嫌なこと忘れれる。露山の絵には、人を引きつける魅力があるのさ」と三田さんは言う。

## 追憶。放浪の果てに

この数カ月間を振り返りながら、本当に露山の絵には、人を引きつける特別な何かがあると聞いた。「あなたも引きつけられた口だな」。三田さんは冷やかすように笑った。

白石に戻ってほどなく、露山の住んでいた場所が分かった。区内在住の野上富太郎さん(八〇)がその手掛かりをくれた。大きな農家だった野上さんの父親が露山に畑を貸していた、親しく付き合っていたそう。露山の住まいは、菊水劇場という映画館の裏の二戸長屋であったという。現在の菊水六条二丁目あたりだ。数軒の家を訪ねて回ると、古くからある燃料店でその場所を教えられた。往時地域の映画館としてにぎわった菊水劇場も今はなく、露山の住まいも駐車場に変わっていた。

露山は一般にはほとんど知られていない無名の画家だ。だが、馬と酒と自由な旅を何より愛した俊才だった。露山が没してから五十五年が過ぎ、白石の街もすっかり様変わりした。都市化や車の普及に伴い、畑や馬は次第に白石から消えていった。そして人々の露山の記憶も遠くなりつつある。だが、露山の絵は今も生き生きと伝えている。まだ多くの畑があり、馬と共に暮らしていた時代の白石の面影を。漂泊の画家は、白石を終の住処に定めた。長い放浪の果てに、露山はこの地で何を思ったのか。彼の生きた時代に思いを馳せながら、かつて露山が住んでいた場所にしばらくの間立ち尽くしていた。

▶野上富太郎さん所蔵。前面の馬が八方にらみの特徴を備えているのが分かる。露山は、頭頂部がはげ、白いひげを蓄えている、もの静かな人だったという。(白石区)

